

# 幼児に聞かせるお話

四四

水谷 年 恵

## 蟹のあぶく

暑い暑い日に猿が川端へ水を飲みに来ました。

其處へ子蟹がちよこくと這出して來ました。すると猿が、

弱蟲、小蟲、泥水飲めやーい。

と言つて、泥水をひつかけました。子蟹はびつくりして、逃出しました。

親蟹がおこつて、猿に見附からないやうに、こつそりと水の中へ潛り込んで、猿が水を飲むのを待つてゐました。そんな事とは知らずに、猿がうつむいて、川の水に口をつけて、飲まうとすると親蟹が缺て、猿の唇をきゆつと挟みました。猿は驚いて、顔を上げました。親蟹は急いで深い水の

方へ逃げて行きました。猿は、

親蟹、大馬鹿、此の石食へやーい。

と言つて、石ころを幾つもくく投込みました。其の石が二つも三つも、親蟹の脊中へあたりました。

親蟹が、仲間の蟹に其の事を話しました。すると、仲間の蟹は腹を立て、大勢でぶくくぶくくくと、あぶくを出し始めました。眞白なあぶくがぶくくぶくくと重なつて、しまひにはあぶくのお山が出來ました。

猿がおうちへ歸らうと思つて、ぶらぶら來ますと、眞白なお山が出來てゐるので、眞白いお山だ、涼しいお山だ。

と言つて、あぶくのお山へ這入らうとしました。

そしてあぶくの中へころがつて、あぶくだらけになつてしまひました。大勢の蟹が、

猿まけ、大まけ、あぶくがうまいか。

わーい、わーい。

と言つて噓し立てました。すると猿が、

た、た、助けてー、

た、た、助けてー。

と泣出しました。

其處をお二方の神様がとお通りになりました。お一方の神様は大きな如露をお持ちになつた雨の神様で、もうお一方の神様は、大きな袋をしょつた風の神様でありました。お二方はあぶくだらけの猿を御覧になつて、

あつはつ、はつ、は、

あつはつ、はつ、は。

とお笑ひになりました。そして風の神様は、大き

な袋から涼しい風を、お吹かせになりました。雨の神様は、大きな如露から、冷たい雨をお降らせになりました。猿のあぶくは、風や雨ですつかりとれてしまひました。猿も蟹も大層涼しくなつて、いゝ心持になりました。

お二方の神様は、

猿もよくなれ、蟹もおこるな、

仲よし小よしに、なつとくれ。

とおつしやいました。

慾深三太郎

慾深三太郎の畑に、大きな西瓜が百ばかりになりました。慾深三太郎はおいしさうなのから、ちぎつて來ては、井戸の水で冷して、うまい〜と言つて食べました。

或日慾深三太郎が、いつものやうにおいしい西瓜を一人て食べて居ると、よぼ〜の乞食爺さんが來ました。爺さんはかん〜日が照るのに、傘

もさゝずに汗を一ばいかいて來たのでした。慾深三太郎がうまさうに西瓜を食べてゐるのを見て、

「三太郎さん、私にも一切呉れませんか。」

と言つて頼みました、慾深三太郎は、

「いやだ。まづけりやるが、うまいからいやだ。」

と言つて呉れませんでした。乞食の爺さんは、仕方なしに、とぼく／＼と行つてしまひました。

その後へ又一人乞食婆さんがやつて來ました。

やつぱり傘もささず、手拭もかぶらずに、汗びつしよりになつて、

「三太郎さん、どうぞ其西瓜を一口下さい。」

と申しました。慾深三太郎は、

「いやだよ、一口の半分でもいやだよ。」

と言つて、自分一人でうまさうに食べてしまひました。婆さんは悲しさうな顔をして行つてしまひました。

次の日の朝、慾深三太郎が西瓜畑へ行つて見ると、あの大ききうなうまさうな西瓜が一つもありません。まだ五十も六十もなつてゐた筈の西瓜はどうなつたのでせう。慾深三太郎はびつくりして畑の中ぢう捜し廻りましたが、とう／＼一つも見附りませんでした。慾深三太郎は、

「きつと盗んだ者があるにちがいない。」

と言つて一人でちこり出しました。すると、

「だあれも盗みはしないよ。」

と隣りの畑で茄子が言ひました。

「そつちを御覽、西瓜は無事だよ。」

とお向ふの畑の南瓜が申しました。

慾深三太郎が、振向ひて見ると、

「此處までお出て、甘酒進上。」

「由良さんこちら、手の鳴る方へ。」

と言つて、澤山の西瓜が、ころ／＼、ころがつて行きます。慾深三太郎は、

「やあ、俺の西瓜だ、みんな畑へもどつて来い。みんなもどつて来い。」

と叫びましたが、西瓜はどん／＼ころがつて逃げ  
て行つてしまひます。慾深三太郎は、西瓜を追駆  
けて走りました。西瓜はどん／＼ころがつて行つ  
て、慾深三太郎がどんなに走つても追付けませ  
ん。

ころ／＼、ころ／＼。

ころ／＼、ころ／＼。

五十も、六十も、大きな西瓜がころがつて行く後  
から、慾深三太郎が汗を一ばいかいて追駆けまし  
た。西瓜はとう／＼海邊まで来てしまひました。  
そしてどぶん、どぶんと海の中へ飛込みました。  
西瓜がみんな飛込んでしまつた時、大きな波が、  
ざぶんと言つて、其の西瓜をみんな沖の方へ持つ  
て行つてしまひました。

### 星の子

千代子さんがお椽側に腰をかけて空を眺めてゐ  
ました、すると急に黒い雲が向ふの方から走つて  
来て早雨がバラ／＼降つて来ました、鳥がさあ大  
變と慌てゝ飛んで行きます、千代子さんは、雨が  
どん／＼降つて来た、鳥がいちよいて飛んで行く  
あたしのあーかいちや、かしたげよか」と歌ひ

東洋幼稚園牛込分園長 久 門 嘉 祐

なが氣毒さうに空を見つめてゐました、其の中に  
鳥も飛んで行てしまひ雨もちやんと止んで青空に  
なり日が輝り出しました、そしてすぐ向ふに奇麗  
な／＼虹が出ました、千代子さんは虹が出た／＼  
とお手手をたゝいて喜びました、そして夢中にな  
つて虹の方へどん／＼歩いて行きました幾ら歩い  
ても幾ら歩いても虹の處へ行けないのですか